コシダの上限はさらに低く，ともに別子周辺では 1000 m にもなるともちろん見られないし，ミズスギにいたっては新居浜側の低地にも記録がない。この鉱山あとの生育地は，気候的には冷温帯に入る高さで，本来ならブナの出現する環境であるから，普通の状態ならこれらの生育はまったく不可能である。多分換気坑からの温暖な空気による高い気温と地温のためであろう。1975年10月24日の正午すぎ，雨あがりの曇天で無風ないし微風のもとで測定してみると，坑口から 10 m 離れた所で 13.9°C の気温であったが，坑口上部と 2 m 以内では 18.2～18.5°C を示していた。また地表面から 5 cm の所の地温は 14.3～17.4°C であったことから考えると，当然これらのシダが冬を越して生育可能なはずである。ミズスギの場合は噴気孔周辺に自然的な要因で飛んで分布している例はよく知られているが，人為的にできた環境下に新らしく侵入していたところに興味がある。またツガザクラやアカモノといっしょにコシダ，ウラジロ，ミズスギなどが生育するというのは，本来の植生の破壊を問題にするとき，見方によっては何ともおもしろい皮肉な現象といわねばならない。 （高知大学教育学部）

○グアム島で横井庄一氏を生きのびさせた野生植物（富樫 誠） Makoto TOGASHI: Wild edible plants used by Mr. Shoichi Yokoi in Isl. Guam

1976年の12月17日グアム島へ採集旅行に行く機会を得た。その少し前に山崎敬氏から横井氏の著書「明日への道」（グアム島孤独の28年）文芸春秋社，を見せてもらい読みながら旅行を続けた。

イバラ芋 この本の「多崎の襲撃」と云ふ章の内に次の様な一節がある。

「この芋は，いばら芋，別名ジャングル芋といわれ，根元に黒い二．三センチ位の針のようなとげがたくさんあります。また芋づるにも，いばらの木のような細いとげがついています。芋はその根本のとげの下深く三つか四つに別れた根の先に一個ずつついており，芋の皮は厚み二ミリ位で色は茶色，中味は甘くて馬鈴薯のような味です。そしてこの芋には，丸芋と長芋と二種類あり，丸芋の方が味がよく浅いところにあって楽に掘れます。

芋は保存が不可能で，すぐ食べない時は，土の中に埋めておかねばなりません。土の中に埋めておいても，少しでもキズがあれば，そこから腐ってしまいます。埋めないでおいておけば，二，三日で腐り，苦くて食べられなくなります。乾燥して保存しようと思って火で乾すと，紫色に変色し，味は変らないけど見た目が悪くなり，気持が悪いので，うまいうちに食べようと思えば，その都度，掘って食べねばならないのです。

我々は，芋畑の近くに，大葉のタコの木の葉で屋根を葺いたランチョを作り，朝晩芋を食べて暮しました。道具はレモンチンの木の先をとがらして，梃子の代りにして

掘りましたが，手はいばらで血だらけになり，その上周囲に気を配りながら，シャベルも鍬もなしに棒切れで掘るので汗だくの仕事でした。そして，芋を掘った後は，穴を埋めよく踏みかためて，その上にあらい土をかけ，芋の葉をおいて敵に分らぬようにしておくのがひと苦労でした。」

このいばら芋に気を引かれていたところ．幸いに横井さんが永く住んでいたタロホホの谷に行く機会を得た。案内者はこの谷は横井さんの旧領土で，彼が食用とした芋が沢山ありますと云っていた。なるほど藪のそこここに沢山の蔓が見られた。蔓の太いのは上部迄するどい棘がある。最初は蔓の棘ばかり気にしていて，根際のきびしいするどい棘は想像しなかった。とても棒切れで掘ることは不可能で同行者より根堀を借りて小さいのを 2〜3 株を堀った。

この株をとりまく棘は堀起して見てびっくり，株の土中より横に匐枝を 20〜30 cm 伸ばし，これに長さ 2〜3 cm の丈夫な針が 1 cm 間隔で，上下左右に株の廻りにぞっくり出ている。此の棘の下の株より芋の匐枝が数本出て，その先に丸形の芋が数個付いている。通常のこの類の芋の付き方とは異なる。B. C. Stone の The Flora of Guam によれば *Dioscorea esculenta* var. *spinosa* (Roxb.) Prain & Burkill で，グアム島に豊産して野生の唯一の種類であることを知った。この *D. esculenta* は東南アジアには沢山栽培されているが，根際には棘のない栽培種で日本では余り植栽を見ない。

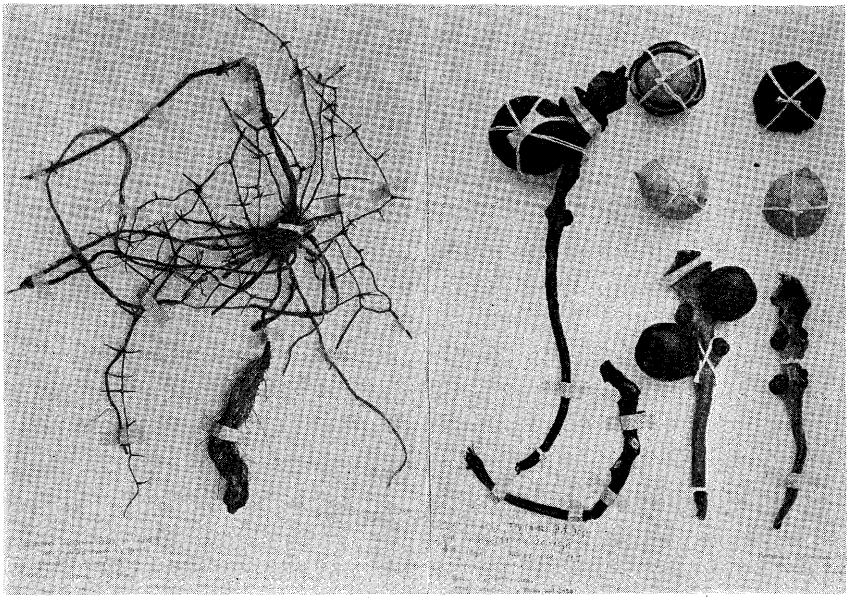

Fig. 1. Left : *Dioscorea esculenta* var. *spinosa*. Right : *Cycas circinalis*.

グアム島では *D. alata* の大薯は沢山に売られていたが，*D. esculenta* の方は市場では見られなかった。

レモンチン　芋堀棒にレモンチンを使ったとあるが原住民のChamorro語でLemon-china か又の名で Lemon-cito がそれではないかと考えられる。戦前に住民から聞いて知っていたのではないかと考えられる。それはグミミカン *Triphasia trifolia* (Burm. f.) P. Wils. (Rutaceae) で，東南アジア原産と云われ，外来種と云われるが石灰岩地帯に普遍的にある棘の多少ある低木で，渡辺清彦著「熱帯植物集成」によると，「果実は食べられる。砂糖煮にして食し，また酒の香料とする」とある。

フェデリコ　横井氏の本にはまた次の記事がある。

「ソテツ（フェデリコ）の実を水であく抜きして煮たり，乾燥して粉にすると食べられるという知識は，私たちが，敗残の身を隠して，多崎村附近の空家を荒し歩いていた時，民家にソテツの実が割って水につけてあったのを見て，幼少の頃どんぐりを水につけてあくを取る話を祖母に聞かされたことを思い出してやってみたのです。初めはあくぬきがたりなくて下痢したり，乾燥すれば悪臭がとれるだろうと，乾燥してみたり，いろいろと工夫の末，失敗に失敗を重ねて最後にはどうにかこうにか食べられるものになりましたが，ジャングル内では，参考書も何もなく，本当の我流の生命がけの創作です。

ソテツの実は，実がなってから5カ月位たち，蕃刀で青い果実を割ってみて，中の薄皮が茶の霜ふり色になっている頃からが食べ頃になります。外側から見ると緑色が次第に濃く黒くなりチョコレート色になってきて，芳香を放つようになるので分ります。

デンデン虫でも，ネズミでも，鹿でも，ソテツの実の外側は食べますが，中の実には青酸カリがあるので決して食べません。中の白い実を四つ割りにして，水の流れにひたし，だいたい4日以上水にさらした後に，手で押えてやわらかくなって曲るものは毒がぬけています。まだ固いものは，毒がぬけていないのでもう一度水につけてさらします。」

原住民の Chamorro 語名 Federico, Fadang, Cycad が使用されるが横井氏はフェデリコを使っている。この島では普遍的にあるが，南部海岸近くの石灰岩地帯に特に多く，樹木の少いサバンナ地帯を好む様である。これはナンヨウソテツ *Cycas circinalis* Linn. (subsp. *circinalis* f. *undulata* (Desf.) Schuster.) である。

果実は熟して径 5×5 cm 球形で稍々扁平で重さ 60～65 gr，果皮はチョコレート色で芳香がある。外皮は厚さ 5 mm 位い，重さ約 30 gr. 位い，核果は淡黄色で倒卵形で径 5×4.5 cm，頂部は少しつまみ状になっていて，重さ 30 gr.。種子は淡褐色で内の仁は淡黄白色で重さ 20～25 gr。

日本のソテツと異なり果梗は長さ 20 cm 前後で，葉柄のすぐ下部の茎に沢山ぶらさ

がって付いていて，未熟の緑色の果が葉柄内の上部にあった。それでこの果実は受精後1年間以上を要して熟すらしい。同一の樹に未熟果と熟果とが上下にあるのを見た。

この仁を横井さんの方法で四ツ割にして10日間流水に浸した後，煮て塩味で食べて見た。ジャガ芋の固煮の様でしこしこしてうまかった。

これらの外には野性植物の食料は記されていないが，多少の動物質を摂取して，よくも28年間も苦労して生きぬいた，横井さんの生命力と精神力は驚異に値いする。

（山梨県南都留郡[redacted]）

□原 寛氏 The Linnean Society of London の Foreign Member に Prof. Hiroshi Hara nominated by the Linnean Society of London as Foreign Member The Linnean Society of London は1788年創立の生物学分野でも最も歴史と伝統のある学会ですが，1976年5月24日の年総会で，本誌の編集代表者　原寛氏が Foreign Member (F. M. L. S.) として，全会一致で選ばれました。これは同氏の永年にわたる IAPT (The International Association for Plant Taxonomy) 役員としての国際的な活躍やヒマラヤの植物の研究業績が高く評価されたためと考えられます。現在まで日本の生物学者（動物学者も含む）で F. M. L. S. に選ばれたのは，天皇陛下を除いてはじめてということです。

一般によく知られているように，The Linnean Society of London はロンドンの目抜き通りピカデリーの Burlington House の中にあって，地下の大倉庫にはリンネの標本が保管されており，また図書室には動，植物関係の稀観書や有名動，植物学者の原稿（未出版）から最近の出版物まで揃っています。また現在も各種の学術雑誌を発行し，国際的シンポジウムや講演会を開催するなど，活発に活動しています。こうした由緒ある学会の Foreign Member に，今回，原寛氏が推挙されたことは，大きな喜びであり同氏に心からお祝いを申し上げます。　（黒川道・Syo Kurokawa）

□日本第四紀学会：日本の第四紀研究，その発展と現状　416ページ，4,700円，東京大学出版会 (1977, I.)。日本第四紀学会がその創立20年を記念して，第四紀学の発展と現状を記録することにより提示したもので，まことに圧巻である。34名の多数にのぼる執筆者が筆をそろえて，会史からはじめて編年，年代測定（放射性元素とフィッショントラックにより），テフロクロノロジー，海面変動，海底地形，地殻変動，氷河作用，古気候　古土壌，植物群及動物群の変遷，人類と文化，古地理の変遷等とまことに多岐にわたって描写し論考されている。現在の植物を取扱うものとして，その近い過去の姿はゆるがせにできないこと論を待たぬから，ぜひ一本を備えてほしいと思う。巻末の資料集は50ページに及ぶもので，少々活字が小さすぎてよみずらい欠点はあるが中々に有益である。ただ付4-5のようにブナクラス域の符号が誤っているなどは困る。　（前川文夫）